

津軽地名雑感

小 館 衷 三

戦後、恩師圭室諦成先生が、故郷の熊本女子大学で、教鞭を取られ、再び上京し明治大学で講義なされるようになった直後、「熊本の地名をしっかりと覚えていたので、郷土の解明が実にはつきりしてきた」と述懐されたことが、強く耳に残った。

それにも拘わらず、歴史・地理科に学び、空間的認識があると思っていた私自身が、実は津軽地方の確認すら出来ていなかった。

曹洞宗史にとりかかり、『日本洞上聯燈録』の「奥州報恩山永徳寺道叟道愛禪師、……後、詣津軽之合浦。愛其風景。建寺号高沢。」の文言にぶつかり、その時は鯀ヶ沢地域に関する理解が薄かったため津軽合浦を青森周辺だけと限って探りつづけてしまった。

またその後、「岩木山信仰史」―比叡山文化の津軽への浸透と定着―にとりかかり、日本海航路・安東水軍の活躍に眼をそそぎ、いやおうなしに地名の確認が必要になった。さらに、先年、県立郷土館の「歴史の道」の調査に携り、弘前図書館の「村日記」（弘化三年）の中に、「西ノ浜下磯通」の記録をみつけ、また、紙漉を研究している花田要一氏から同じ用語のある文書を教えられた。

このように、地名の研究が史学で重要であることに気がつき、続いて

整理していた『東日流外三郡誌』で、安東氏の日本海上での活躍を追いかけて、一層、その感を深くした。

既に、平山久夫氏が「地名より見たる津軽村落の草創に就て」（『国史研究』、第四一号）と題して、岩手県、山形県、秋田県の地名と対比しながら、津軽地方の特色を述べて有益な地名考を展開しているが、私の研究の傍に得た地名からみた考察を若干述べてみることにする。

まず「外ヶ浜」という地名は、古くは青森県全体、陸奥湾／太平洋岸をさしていた。

平安末期の西行の『山家集』に

陸奥の奥ゆかしくぞおもほゆる

壺の碑（いしぶみ）そとの浜風

と歌いこまれ、『吾妻鏡』にも見えている。この「外」に対しての「内」は、日本海岸のことで、西浜・内浜と呼ばれていた。

次に、巻末に掲げた図のように、津軽半島の陸奥湾岸の油川・蓬田・蟹田・今別を上磯と呼び、青森から東の野内・浅虫・平内地方を下磯と称し、その接合点の青森は合浦（あいのうら）であった。同じく、西浜でも、赤石・金ヶ沢・深浦を上磯、鯀ヶ沢から北の七里長浜・十三・小泊地方を下磯と称し、前記『日本洞上聯燈録』にみえる高沢寺のある鯀ヶ沢は、西浜合浦であったと考えられる。

これは都（政治・文化の中心地）からみた上下で、国名をみても、例えば上野・下野となっている。

従って津軽の地方の上磯・下磯を考えると、中央の権力・文化が、日本海を北上して来て深浦↓鯀ヶ沢↓十三↓津軽海峡↓陸奥湾↓油川↓の

コースを辿ったことを物語っているよう。

「廻船式目」によると、十三の湊は三津七湊の一つで、十三の湊を通して、中央の文化が岩木川流域にも浸透した。

問題なのは、この海上交通の担い手である。それが、謎の豪族とされる十三の湊の安倍―安東氏であったことは申すまでもない。

昭和五十七年十二月一日から二十日間、北津軽郡市浦村の山王坊日吉神社境内の発掘が東北学院大学の加藤孝教授、秋田大学の新野直吉教授、東北大学の坂田泉助教授の三氏によってなされたが、その報告書によると、中世の比叡山様式の寺院跡が出現し、早くから天台密教が浸透していたことが証された。

このことは、比叡山文化―熊野信仰の到来を物語るものと想像される。先年、私は若狭國小浜の羽賀寺を訪ねたが、この寺は奈良時代からの寺といわれ、天台・真言と幾度か宗派をかね、現在の本堂は文安四年（一四四七）の建立で国の重文であるが、十三の湊の安倍康季の再建になるものである。

永享七年（一四三五）に焼失した時、当時の商人が後花園天皇に、再建の施主として康季を推挙し、勅命が下された。康季は南部氏との応戦に暇なき身であったが、津軽から資材を運んで再建した。その後、秋田実季も補修を加え、現在二人の像が同寺に祀られている。

昭和四十三年、函館の東郊の志海苔館跡から、三十七万枚余の中国古銭が越前・能登で焼かれた三つの甕に入って出土し、学界を賑わした。

この請来、蓄積に関して、北海道大学水産学部の昆布の研究家の大石圭一氏、蝦夷史研究家の海保嶺夫氏らによって解明が続けられ、「李朝実

録」などの史料から、昆布の交易によることが大方判明した。その交易主は、当時、日本海航路で活躍していた安東氏以外には考えられない、とも推論されている。

最後に、陸路による上方文化の浸透について言及しておきたい。

坂上田村麻呂の北征以来、中央勢力、上方文化が北進してきたことは、山形の立石寺（慈覺大師開創、山寺）、松島の瑞巖寺（旧天台宗松島寺）、平泉の中尊寺（天台宗）、さらに古い岩手県二戸郡浄法寺町の八葉山天台寺の存在などによって証明されている。

この天台宗の支配は津軽まで伸び、岩木山も一時、その支配下にあつたし、乳井―薬師堂、目屋にもその力が及んでいたと思われる（『天台寺研究』の拙稿参照）。

南津軽郡大鰐町の大円寺は旧天台宗で高伯寺と称し、本尊は通称大日様（実は定印の阿弥陀、国の重要文化財）で、平安末か鎌倉初期の平泉仏の傑作と推定された。

また、日本の鬼門にあたる津軽のために、比叡山を移した、といわれる猿賀深沙大権現（天台宗）があり、これは、津軽三千坊の阿闍羅千坊（大鰐の大日様が主尊）の一つであった。この神社の元宮は秋田県鹿角の申ヶ野にあるが、伝説によると、大洪水の時、祭神が津軽に移ってきた、という。また、米代川の上流地域に、古い大日堂が多く、これも陸路による比叡山文化の浸透の一例であろう。

こうしてみると、津軽平野―岩木川流域は日本海を北上してまた上方文化と陸路を北進してきた上方文化との接点であるといえよう。

（東北女子大学助教授）

